



Title	懐徳 第7号 目次
Author(s)	
Citation	懐徳. 1929, 7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88783">https://hdl.handle.net/11094/88783</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「懷德」第七號目次

寫眞侍從御差遣の日  
侍從御差遣

## 藝文

漢學研究法

「于」於「兩」字の古音に就て

最近三  
十年中  
中國新發見の學問

雲林院の研究

新撰姓氏錄を讀みて

拙堂先生の楠氏研究

齋宮必簡に於て

支那の祠廟

瞻仰微言

所感

鳳輦を迎へ奉りて

奉迎式場所感

洛東遊記並詩

詩並歌

文學博士 武内義雄……………一

文學士 財津愛象……………二七

故王 靜安……………三〇

音代節 雄……………三三

貝田四郎兵衛……………三六

今西茂喜……………三九

歌 林田良平……………四〇

歌 寺部君子……………四二

寫眞文學博士西村先生墓

文學博士西村君墓表文學博士内藤虎次郎……………四三

碩園西村先生年譜 吉田銳雄……………四五

本堂記事……………四六

本會記事……………四七

編輯を終りて 山本檜信……………四七

酒井全太郎……………四九



侍從御差遣の日

（六月四日懷徳  
堂支關にて）

今茲六月 聖上陛下大阪に行幸し給ひ、駐驛四日、親しく民情を察し、學事を省み給ひ、又侍從を派して、汎く各種の教化事業竝に社會施設の實況を問はしめ給ふ、叡慮深淵、皇恩廣大、蒼生咸其の仁慈の厚きに和懌感泣せざるはなし、我が懷德堂も亦焉に與る、即ち是月四日、伯爵甘露寺侍從、勅命を奉じて、堂の事業を視察せらる、

顧ふに我が堂は、其の創立遠く享保九年に在り、播人中井鬻菴、大阪の商人富永芳春、吉田盈枝等五同志と胥謀り、三宅石菴を聘して學主となし、講舎を尼崎街に建て、經を講ぜしに勗まる、爾後碩儒相繼ぎ、教統縣延、文教を維持するもの實に百四十餘年、明治二年に至りて廢す、其の後四十餘歲、大正二年大阪在住の紳摺相謀り、斯の堂を重建し、絃誦の聲復起る、其の宗旨とする所は、徳性の涵養と學術の研究とに在り、純乎たる儒風、以て我が國體の精華を輔け、民上の向上を圖る、學徒時に出入ありと雖も、毎に五十人を下らす、而して中に聽講十餘年勤學怠らざるもの十人の多きに及ぶ、洵に盛なりと謂ふべし、憶ふ昔舊懷德堂大阪の文教を司るや、是によりて大阪人の品性を陶冶せしこと幾何ぞ、教化の効

見難しと雖も、此の地今日の盛を致す所以のもの、誰か斯の堂に負ふ所尠しと言はむ、明治元年山階宮晃親王台臨の榮を賜ひしもの、豈其の反映にあらざるなきを得んや、而して今の懷徳堂成るや、其の事業忝くも 天聽に達し、大正三年御沙汰書竝に金貳百圓を下賜せられ、同十二年また金參千圓を賜ふ、尋いで同十五年六月、久邇宮同妃兩殿下の台臨あり、今また畏くも侍從御差遣の寵命を拜す、我が堂の光榮何物かこれに加へん、我が堂の職員及び役員竝に堂友會々員、感激措く能はず、益拮据奮勵、其の宗旨を貫徹し、以て皇恩の萬一に酬い奉らんことを期す、茲に度んで 聖壽の萬歳を祈り、忝しく 寶祚の無窮を頌し奉る、